HeartFull～ハッフル～

ＳＨＯ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＨｅａｒｔＦｕｌｌ～ハッフル～

【Ｎコード】
Ｎ４０２２Ｄ

【作者名】
ＳＨＯ

【あらすじ】
高校進学直前に父親の転勤で桜華町（おうかちょう）に越して来た少年『神名遼（かみなりょう）』。幼い頃に馴染みのあったこの町で、止まっていた時間が今動き出す
―遼の高校生活を通して送る、青春ラブストーリー！

ep1～サクラサクキセツ～（前書き）

この作品に興味を持って頂きありがとうございます！期待を裏切らないように頑張りたいと思いますので、応援よろしくお願い致します！m（__）m

ep1～サクラサクキセツ～

―風が吹いた

暖かく、心地よい風が首元を抜けてゆく。まるで春に首元をくすぐられてるみたいだ。

この町『桜華町』（おうかちょう）にもようやく春が訪れたようだ。今は四月の中頃、入学式はとっくに終わってしまった。

でも、今更になってこの桜華川の土手には数えきれないぐらいの桜が誇らしげに咲きみだれている。

皆、遅い春の訪れを楽しむように所々で花見を楽しんでいた。

俺は神名遼（かみなりょう）。

親の転勤で最近桜華町に越してきた。

と言っても、ガキの頃にじいちゃんの家がこっちにあった関係でこの辺にはだいぶ詳しい。こっちに知り合いもいっぱいいるから学校にはすぐ慣れた。

今日はそのメンバーと俺の引越し祝いを兼ねた花見の日だ。みんなでご飯を食べるのは久しぶりだ。

俺は指定された場所に向かって歩き出した。

「あ、遼ちゃ～ん！こっちこっち～！」

この大声張り上げてるのが俺の母さんだ。名前は麗子と言う。

２０の時に親父と結婚して俺を産んだせいか、他の知り合いの親よりもだいぶ若い。ちなみに親父は史郎って名前で、もうすぐ４０になる。まぁ世間で言うとこの年の差夫婦だ。

「母さん…ちゃん付けはやめろって言ったろ？」

「あら、そうだったかしら？最近物忘れが…」
「まだそんな年じゃないだろ…」
「細かい事はい～の！そんなんだと女の子に嫌われちゃうわよ～…？」
「はいはい…」母さんとはいつもこんな調子だ。でもだからそれなりに上手くいってるのかもしれない。ウチはちまたでよく言われる家庭崩壊とは無縁だ。

母さんに案内されたのは、一本の大きな桜の木だった。まわりには花見客が大勢いる。
そこに敷かれた俺らのシートには、もうみんな集まっていた。
「おせぇぞ神名！未来の絶品料理が冷めちまうじゃねぇか！…なぁ未来？」
「もぉ…慎吾ちゃんたら…誉めすぎだよぉ…」
「そうか？…まだ誉め足りないぐらいだぜ…？」
「…バカぁ…」
…と、ここでノロケまくってんのが俺の悪友風間慎吾（かざましんご）と恋人の前原未来（まえはらみく）ちゃんだ。
何で悪友かってのは…まぁおいおいわかるから深くは語らないことにする…
「はいはい、お前らがラブラブなのはよ～くわかったからな…ほら、冷めちまうんだろ？」
「冷てぇな～神名は…もしかして妬いてんのか？」
「んなワケねぇだろ…バカな事言ってねぇで大人しく食え」
「ちぇっ…冗談が通じねぇ野郎だなぁお前は相変わらず…」
「ほっとけ…」
「ふ、二人共…喧嘩は止めようよ…」
こいつは柊空（ひいらぎそら）。じいちゃんの隣の家の娘で、ガキの時からよく遊んでる。まぁ…幼なじみ…かな…？
「そうだよ慎吾ちゃん。今日は神名君が主役なんだからね」

「へいへい…」
「―さ、みんな♪どんどん食べてね♪おばさんと未来ちゃんが腕によりをかけて作った特製よ～♪」
「…おぃ母さ―」
「へぇ～い！いただきま～す！！」
「あ、慎吾ちゃん！それアタシの唐揚げ～！！」
「ふふふ…未来よ、この世には弱肉強食って言う言葉がだな―」
「はぁ…」
こうして、俺のお祝いの為の花見は俺を完全においてきぼりにして始まったのであった…

■2■

数時間後、料理もすっかり片付き、会はお開きになった。
「今日は楽しかったね。じゃあ明日学校で！」
「おう」
「神名～迷子になんなよ…？」
「なるか！！」
「だっはっは！じゃあな～アディオ～ッス♪」
慎吾は未来ちゃんと二人で帰って行った。最後の発言が気にくわないが…
でも、あいつはあのままがいい。あの馬鹿騒ぎも、それはそれで楽しかったりする。
「さ、遼ちゃん。私達も帰りましょ。お父さん帰って来るし」
「うん、わかった。…空はどうするんだ？」
そう言うと空は、一瞬ためらった素振りを見せた。
「えと…お母さん…まだ来られないって…」
「そうか…空ん家ここからじゃ遠いもんな…。待つのか？」
「うん…」
空は静かに下を向いた。

空は昔から静かな奴だった。みんなが遊んでても、いつも陰からじっと見てるような奴だった。
最初はあまり気にしなかったんだけど、何回かそれを見かけるうちに、だんだん気になり、俺から話かけた。

『…こっち、来いよ』
『…うん』

それが、アイツとの最初の会話だった。

その時から、俺は空を気にかけている気がする。
何でかはわからないけど、何かほっとけないのだ。

「母さん、先帰ってて」
「…遼ちゃん？」
「俺、空の親来るまで待つわ。このまま一人にするのも危ないしさ」
「い、いいよ神名君…そんな―」
「いいから…な、母さん？」
「…わかったわ。そのかわり、気を付けて帰るのよ？」
「了解～」
「じゃあ、またね空ちゃん」
「あ、はい。さようなら…」
母さんが行ってしまうと、辺りに静寂が戻って来た。春先なのに、今日の夜は結構寒い。
「…暇つぶしにこの辺り歩くか？」
「…うん」
土手を登って細い通路に出ると、町の明かりが目の前に広がった。
それに桜が照らされて、青白い光を放っている。
お互い何も喋らないまま、時間が過ぎる。何か喋らないとと思うんだけど、言葉が出てこない。俺達は近くのベンチに腰掛けた。
「あ…上…！」
「…ん？」
言われるままに上を見ると、真上に大きな月が見えた。満月よりちょっと欠けているが、とても綺麗だ。
「よく…二人でお月見したね」
「あぁ、砂で団子とか作ったっけ…」
「そうそう。でもあの時は夕方に見える月だったけどね」
「懐かしいな…」
「うん…」

「…こうして、また二人で月見してるのって何か不思議だな」
「…どうして？」
「何かガキの頃に戻ったみたいな気がしてさ…」
「そうだね…」
僅かに風が吹いた。ほんの少しだけ舞い上がった桜が、月光を浴びてより一層輝きを増して見えた。
「…そん時の合言葉…覚えてるか？」
「合言葉…？」
「ほら、二人で毎回言ってたやつ」
「…うん、覚えてる」
「…いつまでもいついつまでもいつまでも」
「二人は仲良し仲良しこよし…」
「いつか一緒にあの空に！」
「キラキラ光るあの月に…！」
『二人で飛んで行きたいな！！』
「…っぷははははは！」
「ふふふ…」
思わず二人で笑ってしまった。月明かりが一層強くなった。それは何だか月が優しく微笑んでるみたいに柔らかな光だった。

突然着信音が鳴った。空は慌てて携帯電話を開いた。どうやら両親からのようだ。
「迎えか？」
「うん…行かなくちゃ…。ごめんね…？」
「気にすんなよ。楽しかったしさ」
「私も…」
「…明日の一限目…何だっけ？」
「え…っと…確か数学だったと思うよ…？」
「そっか…。車まで送ろうか？」
「私もう高校生だよ…？大丈夫」

「全然成長してないけどな…」
「あ、酷い神名君…！」
「あはは、すまんすまん…。…また、明日…」
「うん…じゃあね…！」

歩きながら空は何回も手を振っていた。
それに応えながら、俺は去って行く空の背中をぼーっと眺めていた。

強い風が吹いた。

今年の遅めの春一番に舞い上がった桜が、月明かりの中にぼんやりと浮かんでいた。
それは大きな円を描きながら、月明かりに吸い込まれるようにして見えなくなった。

また寒気が襲ってきた。
俺は何かもやもやを引きずりながら、月明かりの照らす道を歩き始めた。

ｆｉｎ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4022d/

HeartFull〜ハッフル〜

2010年10月11日02時03分発行